



2017

龍谷大学 社会学部

社会共生実習 活動報告書



発行：2017 年度 龍谷大学社会共生実習運営委員会

2018/3/31 発行

You,
Unlimited



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

目次

ご あ い さ つ	2
地域エンパワねっと	3
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	3
(2) 2017 年度の取り組みの紹介.....	4
(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題.....	4
りとるたんご大学 2017 年度夏学期.....	7
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	7
(2) 2017 年度の取り組みの紹介.....	7
(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題.....	8
能美の里山生活史プロジェクト	9
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	9
(2) 2017 年度の取り組みの紹介.....	9
(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題.....	10
「子どもにやさしいまち」を作ろう	11
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	11
(2) 2017 年度の取り組みの紹介.....	11
(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題.....	12
学生による救命講習等を活かした地域防災活動／The First Aid	14
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	14
(2) 2017 年度の取り組みの紹介.....	14
(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題.....	14
雑創の森プレイスクールプレイワーカー	16
(1) 取り組みの趣旨・目的.....	16
(2) 2017 年度の取り組みの紹介.....	16
(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題.....	16
発信情報	18
WEB.....	18
メディア	18
その他の広報媒体.....	19

ご あ い さ つ

2017 年度 社会共生実習運営委員会

運営委員長 猪瀬 優理

「社会共生実習」は、社会学部全3学科が共同で運営する、社会学部の現場主義を体現する中核となる実習科目です。本実習では、学生たちが大学外部の様々な連携機関と協働して、社会の諸問題に対する理解を現場の中で深め、行動していくことを重視し、所属教員がそれぞれの専門知識やフィールド、人的ネットワークを生かしたオリジナルのプロジェクトを提供しています。社会学部の学生は所属学科を問わず希望するプロジェクトに参加できます。学生にとっては連携機関の方々との交流だけでなく、学科を超えた学生同士の交流も体験することになります。

今年度は「社会共生実習」としての幕開けとなりましたが、①「地域エンパワねっと（担当教員：猪瀬優理、築地達郎、筒井のり子、川中大輔）」、②「りとるたんご大学2017年度夏学期（担当教員：工藤保則）」、③「子どもにやさしいまち」を作ろう（担当教員：田村公江）」、④「学生による救命講習等を活かした地域防災活動／The First Aid（担当教員：栗田修司）」、⑤「能美の里山生活史プロジェクト（担当教員：笠井賢紀）」、⑥「雑創の森プレイスクールでのプレイワーカー（担当教員：久保和之）」というバラエティにとんだ6つのプロジェクトが出揃いました。

本報告書では、各プロジェクトの1年間の活動とその成果を報告させていただきました。報告からは各プロジェクトにおける連携機関の皆さまから多大なるご協力をいただいたことが拝察されます。心より感謝を申し上げ、引き続きご高配いただきますようお願い申し上げます。

本報告書の内容を通して、現代社会が直面するさまざまな課題や問題を知っていただき、少しでも考えていただけるような機会となりましたら幸いです。

2018年3月

地域エンパワねっと

担当教員：猪瀬優理、築地達郎、筒井のり子、川中大輔

(1) 取り組みの趣旨・目的

「地域エンパワねっと」（愛称は「大津エンパワねっと」）は2007年度、本学部が立地する大津における地域活性化、本学部に学ぶ学生の学びの質的向上、そして学部における教学改革の3つを目的として始まったものである。同年度、文部科学省の「現代GP」に採択され、学部所属の全学科（当時は4学科）の共同プロジェクトとして発足した。学生と地域住民が直接出会い、地域運営のための活動に向けて協力し合うことを通じて、相互にエンパワメント（潜在化した力を引き出すこと）され学び合う関係を創出することを目指した。

当時、本学部には所属する学科に関係なく受講できる科目すらなく、カリキュラムは学科ごとに閉じていた。また、地元地域という学外の教学資源を組織的・体系的に教育に導入することもおこなわれていなかった。本プログラムが起点となり、2016年度カリキュラム改革において、多くの講義系科目の学科間の乗り入れと「社会共生実習」の実現につながったといえる。

本プログラムの最大の特徴は、「課題をあらかじめ設定しない」ということである。大学で取り組まれる社会連携型教育の多くは、教員が持つフィールドやネットワークの中であらかじめ設定された課題に学生が取り組むものがほとんどだが、本プロジェクトでは学生が地域住民と共に取り組むべき課題を見つけ出す。

これは学生にとっては極めて難易度の高いことである。そこで本プロジェクトでは、担当教員と地域住民のリーダー層（地元自治連合会会長など）とが定期的に（原則毎月1回）会合を開き、地域の動きや学生の動きを常に共有している。そのように共有された情報にもとづいて、学生の動きを適切にファシリテートするのである。

プログラムは原則として1年間で編成される。大津市の「瀬田東学区」と「中央地区」がフィールドとして協力してくれている。受講生は、前半は地域における「課題」の発見、後半は発見した課題に対する「解決方策」の立案と実施が求められる。

受講生にはまた、地域活動の成果をわかりやすくまとめて地域住民にフィードバックする「報告会」への参加と口頭報告および文書での報告が求められる。報告会は前期と後期の終盤に各1回開催されており、受講生は地域住民の前でプレゼンテーションをおこなう。

地域活動を終えた受講生は、学科ごとに指定された関連科目を単位修得することによって「龍谷大学まちづくりコーディネーター」の認定を受けることができる。

(2) 2017 年度の取り組みの紹介

2017 年度は本プロジェクト 10 期生の学生計 17 名を迎え、4 つのグループ（2 地域に各 2 グループ）に分かれて活動をおこなった。瀬田東学区においては「子ども会活動の活性化」「子どもの防災意識向上」、中央地区においては「地域の魅力の（地元住民による）再発見」「地域の魅力の対外的発信」がテーマになった。

2016 年度からの新カリキュラムの下で初めて開講された 2017 年度の授業は、他のプロジェクトに合わせるために割り当て単位数が旧カリキュラムと比べて半減した。これに伴い、実習指導のために設けられた授業時間も金曜日 1・2 講時の 2 コマから金曜日 2 講時のみの 1 コマに半減した。このため、前年度までに蓄積されてきた運営ノウハウの大幅な見直しを余儀なくされた。

具体的には、前半の冒頭に教員が引率しておこなってきた現地視察活動（「まちあるき」と呼んでいる）をおこなうことが不可能になった。これについては、受講生に地理的情報と「地元の人 3 名以上に会ってヒアリングをしてくる」という課題を与え、受講生個々の空き時間を使って取り組ませるようにした。

また、やはり前半の冒頭の重要なイベントである「地域デビュー」の運営も困難に直面した。これは受講生と地域のキーパーソンが相互に知り合い、地域課題を共に見つけ出すことができるような関係性を構築する上で極めて重要であるが、これも地域に出向いて開催することが不可能になった。今年度は地域の皆様に来校いただき、90 分間で慌ただしく交流することになった。

(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題

上述のように、受講生にとっては、前年度までに比べて少ない情報と希薄な人間関係の中で、地域活動に取り組むことが求められることとなった。

受講生らはそうした制限要因をなんとか乗り越え、各グループとも一定の成果を挙げることができた。

具体的には以下のとおりである。

〔瀬田東学区〕

- ① 学区における子ども会活動の実態を、地域住民に代わって把握することに貢献した。
- ② 遊びを通じた防災教育のために、教育玩具の開発に成功した。

〔中央地区〕

- ① 旅行者などに宿場町の歴史に関心を持ってもらうために、旧東海道の情報マップを制作することになった（試作品を作成した）。
- ② 地域住民に地域の生活や仕事の歴史（ライフヒストリー）を取材し、新創刊された地元広報紙に記事を提供した。これにより、地元への関心を高めてもらった。

次年度に向けては、カリキュラム改革に伴って露呈した運用上の問題をチェックし、効果的な運営方法を再構築する必要がある。このために、次年度の担当者会議を早めに繰り返し開催し、到達目標の再設定と前例に囚われない運営方法を模索することとしている。

▼初めての授業



▼まちあるき



▼まちあるきのフィードバック



▼地域デビューにて情報収集



▼地域デビューにて情報収集



▼チームでミーティング



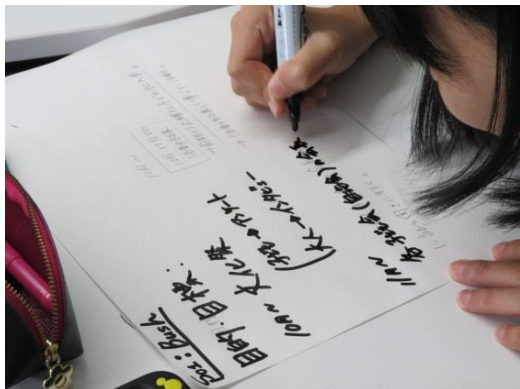
▼前期報告会



▼前期報告会後 情報交換会



▼中間報告



▼イベント風景



▼防災グッズの手作りカード



▼後期報告会に向けてミーティング



▼イベント準備



▼イベントの予行練習



▼イベント風景



▼後期報告会 集合写真



りとるたんご大学 2017 年度夏学期

担当教員：工藤保則

(1) 取り組みの趣旨・目的

京丹後地域には高等教育機関が存在しない。高校卒業後、大学進学を希望する場合は、かならず地元を離れることになる。その事情を背景に、2015 年 3 月にアーティスト集団「ロケット探偵団」丸山桂氏を中心にして、京丹後在住/関係の有志と、京丹後出身の大学 4 年生とによって「りとるたんご大学」というイベントがおこなわれた。それは、京丹後出身学生が地元の方々の前で「大学で学んだこと」を講義形式で発表するというものであり、出身学生、地元の方、ともに好評のうちに終了した。

本プロジェクトは「りとるたんご大学」を継ぐものとして企画したが、そのまま再現することは目指さなかった。「りとるたんご大学」の成功をふまえながら、またそれを大いに参考としながら、受講生が丹後の人たちと共に考えながら新しいものを作ることを目指した。そうすることによって、受講生が企画力・運営力を身につけるとともに、「地方」「農山村」を（ある意味で）発見することを目的とした。

(2) 2017 年度の取り組みの紹介

今回のイベントの名称は、受講生との相談の結果「丹後つながる大学」とした。開催日は 2017 年 8 月 6 日（日）、開催場所は京丹後市の旧・郷小学校、講師陣は「現役大学教授」5 人、「現役大学生教授」2 人、「丹後人教授」3 人、となった。

「丹後つながる大学」を開催するために、受講生は学内での毎週のミーティングに加えて、学外での活動も積極的におこなった。京都市内在住の京丹後市出身者とのミーティングや、京丹後市でのミーティング、フィールドワークもおこなった。また京丹後市における事前のイベント準備だけでなく、宣伝活動にも加わった。

宣伝の一環として、チラシやポスター制作にも関与した。その際に考案した「私たちは、少し離れているから、つながることができる」というコピーや、「丹後と大学は少し離れている。大学は様々な人が集まる場所であり、先生も学生もみんなて学ぶことの楽しさや喜びを共有できる場所です。丹後と都会。大人と子ども。悩んでいる人とワクワクしている人。考え方や立場が違うから、共に学び合うことができます。この日、丹後と大学が少し近づきます。そして、学びが人と人をつなぎます」という文章は、本プロジェクトと今回のイベント「丹後つながる大学」のキーコンセプトとなった。

イベント当日、受講生は来場者への対応やサポートスタッフへの対応など、運営側として全面的に関与した。

(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題

来場者はおよそ 60 人。それ以外に、イベントをサポートしてくれた方が約 10 人、講師（丹後つながる大学教授）として関わってくれた方が約 10 人、合計約 80 人が集うイベントとなった。来場者からはおおむね良い評価をいただいた。

受講生においては、運営側としての課題も多く残った。以下に、受講生自身が感じた課題を示す。

- ・「今回の実習でうまくいかなかったと感じたことは、情報発信である。私は、SNS を通して実習内容を掲載していたが、掲載し始めたのが遅かったので、もう少し早い段階から掲載してより多くの人に情報発信をする必要があったと感じた。また、Facebook だけでなく Twitter やブログといった様々な SNS をメンバーで担当を決めて情報発信をすることによって、できるだけ多くの人たちに私たちのイベントを知ってもらうことができたのではないかと考えた。加えて、高校生の参加率が悪かったことから、私たちが高校を訪問し、直接、情報発信する機会を持つことができればよかったと思った。」
- ・「振り返ってみると、あの時にこうしていればさらに良くなったかもしれないと後悔することがいくつかある。それは、自分がしたいことを上手に伝えられなかったことや、やりたいがあってもどのようにすればいいのかわからずにできなかったことが影響していると考え。これは、自分がやりたいことは全て自分の力でなくてははいけないと勘違いしていたからではないだろうか。このことから、もっとたくさんのコミュニケーションをとるべきだったのではないかと考える。そうすれば、私がひとりで考えてもわからないことの解決策を知っている人が現れたかもしれない。こういうふうに、後から気付くことも多かった。」
- ・「うまく分担ができなかったこと、うまく情報共有ができなかったことが反省点である。共有することで、自分たちではできないことをほかの人に手伝ってもらったりすることができたと思う。お互いに共有すれば 1 人に負担がかかったりしなかったと思う。また、イベント開催までのスケジュール（何をいつまでに準備するのかなど）を細かく考えられなかったことも反省点である。もっと計画的にすれば当日慌てずに済んだのに、と思う。共同作業においては、（情報共有と共に）先のことを考えて行動することの大切さを知った。」

これらから、受講生は課題を具体的に捉えられていることがわかる。またその改善策を講じているものもある。そのこと（課題を具体的に捉えられている。改善策を講じている）は、本プロジェクトの成果ともいえるだろう。

能美の里山生活史プロジェクト

担当教員：笠井賢紀

(1) 取り組みの趣旨・目的

里山は、手つかずの自然とは異なり、人の暮らしが自然と密接にかかわり、自然に影響を与えている場所である。そのため、里山での暮らしは都市部での暮らしと異なり、自然とどのように共生していくかが重要である。他方、里山では高齢化や少子化、あるいは過疎化といった社会的に「問題」とされる状況を他地域に先んじて受けている。

こうした状況において、今もなお里山で暮らしている人たちの、これまでの生活を丹念に聞き記すことを本プロジェクトでは目指した。里山での暮らしを悲観的に見るのではなく、逆に理想的に描くのではなく、暮らしている人たちの日々を聞き取って記録し共有するという地道な作業である。

もちろん、里山での暮らしのアーカイブ(記録)としても位置付けられる。同時に、今後、日本の多くの地域が直面する上記のような状況の先進地のありかたを示すものとしても位置付けることが可能だろう。

本プロジェクトを通じて、受講生は自然と人との共生する社会とは何か、そして人間関係が密な社会における共生とはどういったものかという複層的な「共生社会」像を、聞き取りの実習を通じて学ぶことが企図される。

(2) 2017 年度の取り組みの紹介

本年度は、石川県能美市仏大寺町という 10 余軒から構成される中山間の集落をフィールドとした。受講生は第 1 学期を通じて聞き取りの方法や能美市に関して学び、集落とアポイントメントを取った。その上で、7 月に全受講生が集落を訪れ、3 名の生活史を個別に聞き取った後にグループインタビューをおこなった。この第 1 回訪問では能美市役所の協力も得て、能美市内を周遊して地域の暮らしや文化についての理解を深めた。

夏休み中に録音データを文字に起こし、第 2 学期の前半で冊子を制作した。10 月には完成した冊子を携えて集落を訪問した。この第 2 回訪問は集落が会場となって開催される「能美ほっこりまつり」の開催日に合わせており、受講生は冊子を住民や来場者に配布するとともに、まつりの運営を手伝った。

第 2 学期の後半は里地里山に関する学修に取り組んだ。また、次年度実習に向けて岐阜県垂井町に拠点をおく NPO 法人「泉京・垂井」に協力を得て揖斐川流域の里地里山を視察した。

(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題

石川県能美市仏大寺町の多くの住民と話したりまつりを作りあげたりすることで、単に「調査する者」と「調査される者」ではない交流と信頼関係の醸成が図れた。また、受講生たちは調査の方法や苦勞、成果物の作成手順、取材プロセス等につき実習を通じて体得した。また、住民やまつりの参加者に配布するための小冊子を制作した。小冊子は全 18 ページで、3 名の生活史や仏大寺の暮らしについて簡易にまとめたものである。受講生の感想も掲載されており、成果報告会向けに作成したポスターと合わせてみることで 1 年度間の取り組みを知ることができる。

初年度の実習として、十分に目標は達成できた。ただし、生活史の聞き取りという観点から評価すると、地域の歴史・文化・産業や里山での暮らしに関する基礎的な知識が欠如しているために「浅い」聞き取り・記述に終わっていることが残念である。また、生活史は語りそのものが重要であるが、小冊子を制作する際に受講生たちが「そのまま長く書いても誰も読まない」として過剰に「要約」してしまったことは、生活史と向き合う姿勢を身に付けられていなかったとして反省すべき点である。

次年度は岐阜県揖斐川流域の里地里山にも訪れる予定であり、異なる里山どうしの共通点や違いに敏感に気付けるように学修を進めたい。



▲小冊子の表紙



▲成果報告会ポスター

「子どもにやさしいまち」を作ろう

担当教員：田村公江

(1) 取り組みの趣旨・目的

「子どもにやさしいまち」とは、子どもの権利を満たすために積極的に取り組むまちのことである。本プロジェクトでは、子ども支援を手掛けるNPOや民間団体と連携して、「子どもにやさしいまち」を作るための学習と実践をおこなう。

(2) 2017年度取り組みの紹介

① 授業時間内の学習

1) 実習で得たことを共有するためのミーティング

ホワイトボードを使って、書き手と話し手双方のスキルが伸びるようなミーティングをおこなった。

2) 「5段落エッセーのフォーマット」で文章を書く

実習で得たことを受講生自身の言葉でレポートにするために、「5段落エッセーのフォーマット」を使った。

3) 『若いアスリートのための権利の章典』（田村訳）を基に作成した「寸劇ワークショップ」

これは、スポーツの場面で子どもの権利が尊重されないために発生する事例をバッドエンディングのシナリオに作ったものを使うワークショップである（田村作成）。体罰や理不尽な指導が発生しがちな日本の部活について、問題を解決するための工夫を考えることができた。

4) 実習についての打ち合わせ等

本プロジェクトでは受入れ先が4か所あり、随時、さまざまなイベントが開催されている。授業時間を使ってどの受け入れ先に行くのかスケジュールを決め、事前学習をおこなった。

② 実習受け入れ先での活動

子ども支援をおこなっているNPOや民間団体と連携して、子ども支援の現場について学んだ。連携先別に取り組みを紹介する。

1) 体罰をみんなで考えるネットワーク

この団体は2012年に発生した桜宮高校体罰事件を機に、研究者、スポーツ指導者、子育て支援団体、学校事故・事件（体罰、指導死など）の家族、一般市民などが集って作られた。この団体は年4回の定例会を開催して、子どもの人権と体罰問題に関する学

習・啓発事業をおこなっている。受講生らは、定例会の運営スタッフとして参加した。

2) CAPセンター・JAPAN

この団体は子どもの権利の尊重、子どもへの暴力防止のために活動している。この団体が開催する講演会や講座に参加して子どもの権利についての理解を深めた。

3) はっぴいポケットみ・な・と

(子ども情報研究センターが大阪市から受託しておこなっている子育てサロン)

大阪区港区の尻無川自治会館1階で、月・火・水・金・土曜日の10時～15時に開所されている育児サロンで補助スタッフとして活動した。

4) かんちゃんの小さな家

ここでは「かんちゃんホットルーム」というイベントが開催されている。これは、地域の子ども、保護者、お年寄りが集まって交流し、昼食を作って共に食べるというものである。参加する子どもたちは幼児から小学生であり、受講生らは子どもと遊んだり、料理作りや工作などを補助したりしながら、子どもをめぐる問題について理解を深めた。

③ 学生企画

組体操について大学生意識調査(アンケート)をおこなった。受講生らは、質問紙のワーディングやレイアウトについて話し合い、調査協力者への趣意書も作成した。本学瀬田キャンパスで開講されている授業で、担当教員の許可を得た上で質問紙の配布と回収をおこない、66票を回収した。

(3) 2017年度の取り組みの成果と課題

① 授業時間内の学習

1) 実習で得たことを共有するためのミーティング

オーブンクエスションを使って話を聞く力、聞きながら書く力を伸ばすことができた。反復練習が必要なので、今後は毎回おこないたい。

2) 「5段落エッセーのフォーマット」で文章を書く

受講生らは「5段落エッセーのフォーマット」を難なく習得した。今後の課題としては、子ども支援に関する学術文献や記事等を読み、内容を「5段落エッセーのフォーマット」を使ってまとめることである。

3) 『若いアスリートのための権利の章典』(田村訳)を基に作成した「寸劇ワークショップ」

1回しかおこなえなかったなので、成果がどれくらい出たのかよくわからない。今後の課題は、受講生らがこのようなワークショップを自分たちのアイデアで改良すること、そして、受講生らがファシリテーターになって子どもたちにこのワークショップをおこなうことである。

4) 実習についての打ち合わせ等

打ち合わせや事前学習によって実習への目的意識を高めることができた。課題は、イベントに参加する予定の受講生が体調不良などで欠席したり遅刻したりした場合の対応である。

② 実習受け入れ先での活動

1) 体罰をみんなで考えるネットワーク

さまざまな立場の大人が「聞く気」で講演を聞く姿に、受講生らは大きな刺激を受けた。また、体罰や指導死について、受講生らは深刻さを実感していなかった。しかし、遺族の話を聞くことによって初めて深刻さに気付くことができた。課題は、参加率を高めることである。

2) CAPセンター・JAPAN

この受け入れ先での実習も「座学」であるが、座学を基に実践的な学習ができたのが良かった。

課題は、講座を全て受講することができない受講生もいたことである。受講生のスケジュール調整が今後の課題である。

3) はっぴいポケットみ・な・と

(子ども情報研究センターが大阪市から受託して行っている子育てサロン)

子育ての現実に触れることができたのは、大きな成果だった。課題は、経験することがメインになってしまい、実習の目的が不明確だったことである。受講生が決められた時間に受け入れ先へ行かなかったことがあり、連絡体制をもっと明確にしておくべきであった。

この受け入れ先では月間スケジュールに「パパデイ（お父さんの参加を促す日）」、「絵本の読み聞かせ」、「シングルマザーについて話を聞く日」なども盛り込まれている。こういう企画に合わせた事前学習をすることも、今後の課題である。

4) かんちゃんの小さな家

主催者から、学生が子どもの相手をしてくれるのでイベントの運営がとてもスムーズになった、と評価された。課題は、参加率を高めることである。この受け入れ先とは、地域との連携という点からも、今後、つながりを深めていきたい。

③ 学生企画

本格的なアンケートを一通りおこなうことができ、アンケート調査について自信がついた。担当教員も、アンケート調査の指導および支援の基礎を身につけることができた。課題は、役割分担を明確にすることである。

学生による救命講習等を活かした地域防災活動

The First Aid

担当教員：栗田修司

(1) 取り組みの趣旨・目的

大津市消防局等や市役所危機・防災課、消防団、寺院等の協力を得て、受講生が救命救急の知識習得と、上級救命講習の受講を経て、普通救命講習の指導者として大津市内の防災訓練等で活躍し、さらに防災士の資格を目指しつつ地域防災を学び、防災訓練を盛り込んだ地域イベント等を計画・実施することで、受講生の発信力を高め地域との共生を図ることを目指す。

(2) 2017 年度の取り組みの紹介

大津市危機・防災対策課による講義、大津市消防局による講義・見学、大津市消防操作法訓練大会の見学、人と未来防災センターの見学、大津市夏期火災・防災訓練の見学、湖南広域消防局による講義・見学、大津市上級救命講習の受講、本学龍谷祭実行委員会普通救命講習への補助参加、本学瀬田学舎防火・防災訓練への補助参加、草津市渋川学区防災訓練への参加、草津市防災ミーティングへの参加、彦根市消防本部による講義・消防団の見学、彦根地方気象台による講義・見学、ミシガン州立大学連合日本センターの見学、彦根城の見学、草津市危機管理課 岩佐卓實氏の講演、地域防災支援に関する研究会における三上民喜氏の講演、以上のほかに学内での講義等を実施した。

(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題

2017 年度は、特に「受講生が救命救急の知識習得と、上級救命講習の受講を経て、普通救命講習の指導者として大津市内の防災訓練等で活躍」することで基礎的知識の取得を目指し、各種の行事参加や講演、見学をおこなった。

受講生は、基礎知識を得るとともに、学内での討論も経ることで積極性も増し、また、レポートや報告書の作成により、課題の発見と、その解決のプロセスについても学び、これらの技術も向上したと考えられる。

課題としては受講生が2名であったという点で、学生間での多面的な見方をする部分に不足が見られたが、今後、各種の行事等に参加し、自主的な活動を組み立てる中で、多くの人々と関わるので、この面の成長も見られると考える。

▼大津市夏期火災・防災訓練 1



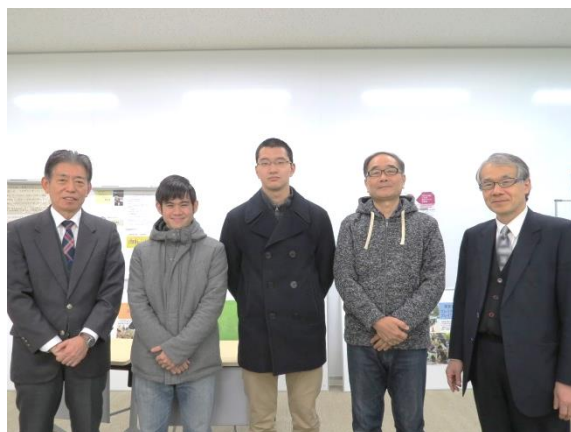
▼大津市夏期火災・防災訓練 2



▼心肺蘇生法



▼特別講義の講師の方と



雑創の森プレイスクールプレイワーカー

担当教員：久保和之

(1) 取り組みの趣旨・目的

子どもたちをめぐるさまざまな問題は、もはや教育や心理的なアプローチだけではなく、社会全体の構造的な問題として考えなければならない現状があり、子どもたちの自発的活動の組織化や社会参画活動あるいは自然体験活動を支援しつつ、地域社会における子どもたちの居場所を築く力を持った「プレイワーカー」が必要とされている。近年、全国的に「冒険遊び場」と呼ばれるプレイパークが増えており、そこで活動するプレイリーダーの育成が急務の問題とされている。

本プロジェクトでは財団法人プレイスクール協会が運営する「雑創の森プレイスクール」において、子どもの自発的活動や支援をするプレイワーカーとして実習をおこなう。プレイスクールに赴き、スクールスタッフのアシスタントとして子どもに対するプログラムを実施していく。実習を通じて、子どもの活動を支援する技術や知識を身につけ、多様な現場で対応できる人材育成を目指すことを目的とする。

(2) 2017 年度の取り組みの紹介

プレイワーカーとしての基礎的素養を身につけるためにさまざまなプログラムを体験する。

まず、プレイスクールについての説明を受け、実際の施設を視察しながら、施設の場所や使い方などを学習した。また、実習に備えて活動の前にロープワークや救急法、焚火のつけ方、工具の使い方などを学んだ。毎週末に活動している「冒険クラブ」と「発明クラブ」に参加し、前期は上級生のアシスタントとして活動した。後期は、企画段階からプログラムに関わり、備品や用具の準備から実施運営を補助した。また、夏季休暇中に「サマーキャンプ」に帯同し、リーダーとして子どもたちと接し、子どもについての現状を学んだ。

(3) 2017 年度の取り組みの成果と課題

前年度までに開講されていた「プレイワーク課程」関連科目の実績があったことから、社会共生実習としての活動は、比較的に容易であった。活動の初期段階では、子どもの対応に不安があり、どうしてよいかわからずに受け身的な様子が見られたが、実習を進めていくうちに、さまざまな経験を積み、積極的に子どもと関われるようになった。

開講当初は男女6名の受講であったが、諸事情により男子学生4名による活動になった。受け入れ先の施設には、男児だけでなく女児もいることから、できるだけ男女の受講生がい

ることが望ましい。また、受講人数によって実施できるプログラム数が変わってくるため、もう少し受講生が増えることが望まれる。

▼ミーティング



▼発明クラブ



▼発明クラブ



▼冒険クラブ



▼やんちゃキッズ



▼お泊り会の準備



▼サマーキャンプ



▼おやつタイム



発信情報

WEB

- ① 龍谷大学社会学部「社会共生実習」公式ウェブページ
U R L : <http://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/>
- ② 龍谷大学入試情報サイト「You,Challenger 未来への挑戦」
Challenger28 として情報を提供
U R L : <http://www.ryukoku.ac.jp/challenger/>
- ③ 「大津エンパワねっと」公式ウェブページ
U R L : <http://www.soc.ryukoku.ac.jp/gp/>
- ④ 「大津エンパワねっと」通信
U R L : <http://www.soc.ryukoku.ac.jp/gp/reports/index.html>

メディア

- ① 2017(平成 29)年 7 月 17 日(月)／中日新聞 (この記事は中日新聞の許諾を得て掲載しています)
【プロジェクト】学生による救命講習等を活かした地域防災活動／The First Aid
- ② 2017(平成 29)年 7 月 21 日(金)／北國新聞 (この記事は北國新聞の許諾を得て掲載しています)
【プロジェクト】能美の里山生活史プロジェクト
- ③ 2017(平成 29)年 7 月 24 日(月)／北國新聞 (この記事は北國新聞の許諾を得て掲載しています)
【プロジェクト】能美の里山生活史プロジェクト
- ④ 2017(平成 29)年 8 月 7 日(月)／北國新聞 (この記事は北國新聞の許諾を得て掲載しています)
【プロジェクト】能美の里山生活史プロジェクト
- ⑤ 2018(平成 30)年 1 月 22 日(月)／読売新聞 (この記事は読売新聞の許諾を得て掲載しています)
【プロジェクト】地域エンパワねっと
- ⑥ 2018(平成 30)年 1 月 22 日(月)／中日新聞 (この記事は中日新聞の許諾を得て掲載しています)
【プロジェクト】地域エンパワねっと

① 2017(平成 29)年 9 月 11 日(月)発行 / 広報誌『龍谷』84 号 / 発行元：龍谷大学
【プロジェクト】「りとるたんご大学 2017 年度夏学期」プロジェクト

社会学部 社会学科
工藤 保則 教授

大学のないまちに手づくりの大学を

京都府京丹後市網野町の廃校・郷小学校に、突如あらわれた1日だけ小さな大学。集まってきた生徒は、地域の子育て中の親子さんを中心に50名ほど。子ども達を片側で遊ばせてから、現役大学生による「語学」や「大学教養」に関する「イクメン」や「大さく学ぶ」や「ドキュメンタリー制作演習」、地元丹後の発明家・交流型「アイデアの作り方」などの講義や、体感・交流型のワークショップを楽しんだ。入り口には「丹後つながる大学」の看板があった。チラシには「私達は、1日だけ集まっているから、つながることによって」の言葉が

これを仕掛けたのは本学社会学部「社会共生実習」の受講生と工藤保則教授、丹後在住のアーティスト丸山桂氏である。丸山氏が2年前に主催した「りとりたんご大学」が前身で、これは丹後出身の大学生が、大学の

ない丹後で、地域の人に向けて自らの学びを講義するというのもだった。この発展型ができないかと、工藤教授は担当する「社会共生実習」の題材とした。集まった学生達で考えてとり着いたのが、今回の「丹後つながる大学」のかたちだった。

「最初は大学生だけで何かするイメージだったのですが、丹後には足を運ぶばかりに、熱い思いのユニークな方がいっぱいいることがわかりました。その魅力が発信で伝えたいなという気持ちに変わってきて、だから今回の先生は、地元出身の学生だけでなく、本物の大学教授陣もいれば、地元の方々もいて、相互で学びあうスタイルにしました。この「丹後つながる大学」が少しでも、人と人がつながっていくきっかけになれればいいなと思います。」(富永優子さん 社会学部2年生)



丁藤教授の「イクメン学」の授業を記録する学生。丁藤教授は現在、4歳の息子を育てている。

14 | Education Unlimited : 工藤保則 教授

Ryukoku Magazine 84 2017 September | 15



教室の半分をフレイルームに、子ども達を遊ばせながらとなりて授業が受けられる。

机上の課題は課題じゃない
自ら社会を「体感する」実習

「社会共生実習」は学科の枠を超え、現代社会に即したオリジナルなプロジェクトに挑むという新しい授業。この「丹後つながる大学」のほかにも「地域エンバワメント」「能美の里山生活史プロジェクト」「子どもにやさしいまちをつくる」などがある。学生はこれらを通して様々な社会課題を学び、解決に向けてチャレンジする。ところが「課題と思って解決してあげるというのは、実は違うのかもしれない」と語るのは丁藤教授。

そもそも「丹後に大学がないならば、大学

生による大学をつくらう」と始まった企画だった。しかし現地足を運ぶうち、地域貢献どころか、既に丹後はエネルギーに満ちていると工藤クラスの学生達は思い始めた。

「大学がなくて若者が外に出ていくことが課題なのかなと。でもよく聞いてみるとそんなたいした問題じゃなかったんですね。大学を欲しいとも思っていなかったり。それよりも丹後には、集まって何か仕掛けようとする力があつた。その丹後の当たり前が「素敵だ」と思いました。都府県ではそのようなことが薄く、丹後から学べるところがたくさんあります」(川中 美月さん 社会学部2年生)

問題を問題として決めてかかるより、問題

はどこにあるかをゼロベースで探ること、体感的に自分に近い問題として捉えるほうが面白い。今回、丹後と関わったことで、逆に「自分達都市部の人間にない結束力」に気づく結果となった。それが彼らの学びだと工藤教授。

「けれども、あるコミュニティのなかに入っていったり、一緒に過ごしていくことによって、生まれるものはある。解決するというのとは違う、つくっていく感じですね。わからないところに飛び込んで、学生とともに進む。『社会共生実習』はそういうことができる授業です」

本実習で今後どんなことが生まれていくのか、注目だ。



工藤保樹くんと共著の「1967年、徳島県生まれ」甲南大学大学院人文科学研究科博士前期課程単位取得退学。博士社会学。都立芸職専攻学助手。『愛と学』助教授を経て、2000年より現職。専門は子どもの社会学、文化は社会学。著に『無印良品の社会学』（共編著）『法律文化』（2011年）、カワイイ社会学（関西学院大学出版会、2015年）、第23回社会峰賞、『オートの育ち』（社会学）（共編著）『ニルヴァーナ書房』（2016年）『基礎社会学』（共編著）（世界思想社、2017年）などがある。

1967年徳島県生まれ
工藤保則・くどうやすのり

Feature Article

People Unlimited

Education Unlimited

World Unlimite

People Unlimited 龍谷人

News & Topics

25

18. Education Unlimited: 工藤保則 教授

Ryukoku Magazine BU 2017 September | 17

② 2018(平成 30)年 1 月 17 日(水)発行 / 広報まちづくり中央

/ 発行元：まちづくり中央(滋賀県大津市中央学区団体連絡協議会)

(この記事は滋賀県大津市中央学区団体連絡協議会の許諾を得て掲載しています)

【プロジェクト】地域エンパワねっと

「大津エンパワねっと」は、龍谷大学社会学部の学生と地域が協働してまちづくりに取り組むプログラムです。現在十期生が中央で活動しています。そのなかのグループ「なぎさふる」にこれまでの活動をレポートしてもらいます。テーマは「ライフヒストリー」。活動の狙い、お二人へのインタビューを紹介しします。

聞かせてください 町家の暮らし あのころの街



大津 エンパワねっと

グループ
「なぎさふる」
レポート

中嶋さん宅

中嶋昭さん(九〇)は、築二百年の町家に住んでいらつしゃいます。
さっそく「町家の良いところは何ですか」とお尋ねすると「天井が高く、風通しの良い造りになっているのがいいですね。夏は扇風機だけでも快適に過ごせます」と。冬の様子になると「裏庭に雪が積もった日はとても趣き深

私たちが大津エンパワねっとでは、さまざまな活動を経て中央に住まれている方々の生き方、生活様式こそが魅力でないかと考えました。私たちの活動は、みなさんにその魅力を発信することで「中央」という町に自信と誇りを持ってもらえるような内容を提供することです。

中央 ライフヒストリー





家に残る古文書に目を通す中嶋さん

い景色になります。それはきれいなものです」と目を細めて話されます。反面、「造りの冬場はとても寒く、厳しいですね」と町屋特有の短所も教えていただきました。

町家に強い愛着心を抱く中嶋さん。その存在を幅広く知ってもらいたいと思っというしやるのが気になり、お尋ねすると、「今の町家は、外側が昔のままで内側は現代的になつてきています。やはり住み心地のことを考えると、やむをえないかもしれません。難しいですね」中嶋さん宅も土間を部屋にしたり、足まわりを広くするなど内部を少し現代風にされています。

「町屋とともに中央に長く暮らしてこられて、印象に残っている思い出はありますか」とお尋ねすると、「地蔵盆ですね。今でも若い出立をするほどです」中嶋さんの町内は今でも結束が強く、祭りや行事があると、子供からお年寄りまでが大勢参加し、と

前岸さん宅

前岸妙子さんは昭和初期に建てられた町家(中央一丁目)にお住まいです。「外見は昔ながらの町家には見えないので、町家暮らしという意識は少ないのですが」と謙遜する前岸さんに「家物語」を語っていただきました。

明治のこの地域には「魚久(うなぎゅう)」という大きな料亭がありました。近くには堀があり、琵琶湖から船でやって来た客をおいしい料理でもてなした人気店でした。しかし、その料亭は無くなり跡地が区切られて、小売商が次々に出店しました。その一つがランプ屋でした。その店も廃業し、昭和五年に祖母の引っ越しと同時に建てられたのが、現在の前岸さん宅です。魚久の冷蔵庫として使われていた地下室は、ランプ屋のガラス捨て場になっていました。それを家族が元の地下室に戻し、戦争中は防空壕になりました。しかし時



大和天井を指し示す前岸さん

代とともに地下室も埋め、窓枠はアルミサッシに、二階和室はフローリングにと、外装・内装ともに昔の姿から次第に変わってきました。

そのような改修工事を繰り返しましたが、「玄關上にある大和天井(やまとてんじょう)だけは残しました」と前岸さん。大工さんから「昔の人の知恵が含まれていて価値のある造りだから」と伝えられ張り替えなかったそうです。これは天井板を外すと二階の家具などを上げ下げできる構造となっていて、大津の町家によく見られる技法だそうです。現在はフローリングが上にあるため使用できませんが、残したことを「良かった」と仰っていました。

古くからの町家は風情があつて素晴らしいのですが、便利で快適であることも大切です。オリジナルの姿を失う改修であっても、あえて「町家の内側」にその証を一つだけ残した前岸さん宅は「粋な町家」なのかも知れません。